

海人の心——テダが花

高阪 薫

甲南大学文学部日本語日本文学科教授。専門は、日本近代・現代文学で、島崎藤村及び島尾敏雄文学に詳しいことで知られる。沖縄祭祀にも強い関心を持ち、調査研究を続けておられる。著書に『沖縄祭祀の研究』（翰林書房、一九九四）、『沖縄の祭祀』（三弥井書店、一九八七）等。

ご紹介いただいた高阪です。先ほど休憩中に、沖縄の花に関する歌（夏川りみ『ていんさぐの花』『黄金の花』、元ちとせ『朝花』、嘉納昌吉『花』、ORANGE RANGGE『花』）を会場に流しましたが、これに関係するお話もしたいと思っております。

岩城先生のお話にありましたが、私も神戸の須磨生まれで、岩城先生より三つか四つぐらい年上です。神戸で嫌な体験を二回したわけですね。一つは神戸の上空襲。昭和二〇年三月十七日夜中。ドカンドカンと打ち上げ花火が空を焦がすような光景は、忘れもしません。それからもう一つが一〇年前の震災です。いずれも今のはやりで言えばトラウマになっておりますが、特に三つ子の魂百までということで、戦災の記憶は鮮明に残っています。焼夷弾がばんばん落ちまして、四、五メートル前に逃げていた女性にズボットと当たって、そのギャーという悲鳴がい

まだに頭の中に残っています。その後六月に神戸はもう一回空襲がありましたが、幸いなことにそのときは岡山の津山に疎開しておりまして。

今、地震が起こる可能性はかなりの精度で分かりつつあるようですが、人間の力ではどうすることもできません。これに対し、戦争は人間の力で回避することができるとは思いません。なぜあの戦争をやったのか……。私は当時幼少でしたけれども、完全な被害者ですね。少なくとも三つ、四つの子ども、あるいは婦女子に、戦争の責任はないと思います。いいとか悪いとかという問題ではありません。根本的にああいう戦争は悪です。今の日本は、あの戦争を肯定して、どうもおかしな雰囲気になっている。私自身は非常に許せない気持ちであります。

私の沖縄への関心は、戦争がかなり関係していると思います。沖縄は地上戦闘をやって、二〇数万人が死にました。摩文仁の丘に平和の礎が作られて、約二三万人の墓碑銘がずつと連なっていますが、あれを見ると、悲惨な戦争だったということを実感します。その後広島、長崎に原爆が落ちました。この戦争について、われわれはいつでも「被害者、被害者」とばかり言っています。本当に被害者だったのか。結局「やられた」という形でしか言わないで、「やった」という加害の事実を忘れているから、今おかしいことになっているのではないかと思います。戦争をやる前に、誰か反対した日本人がいたのかという疑問を私はずっと、今もなお持っているわけです。実は戦時下に、反対した人が沖縄にもいるのです。その

ことに關して、戦時下の沖繩での抵抗の思想の本を一冊書いています。(高阪薫『沖繩或る戦時下抵抗』麦秋社、一九七八)

なぜ戦争をやめなかったのか。そういう日本のうねりがなかったのかどうか。結局「あれは仕方がなかった、仕方がなかった」といまだに語られ、すまされています。今の状況を押し進めていって、後になって「あの時は国民の五〇%、六〇%が賛成したから、仕方がなかったんだ」という状況が再び作られはしないかと危惧しています。

沖繩の花も戦争と関係があるのですが、今日は時間がないので急いで本題に入ります。まず、私の講演のタイトルは、「海人の心——テダが花」です。ウミンチュというのは漁師であり、沖繩の人のことです。海に飛躍して、あちこち渡った沖繩の人には海洋民族的な伝統がありますが、それをウミンチュと呼んだんですね。「チュ」というのは「人」です。沖繩の人は、本土、大和の人のことはヤマトンチュと呼び、それに対して自分たち沖繩の人をウチナンチュと呼びます。「テダ」というのは、沖繩の言葉で「太陽」です。ウチナンチュの心は「テダが花」すなわち「太陽が花」というものを内に持っているのです。これが沖繩の人の生活の、あるいは考え方のプロトタイプ、基本形というものです。

はじめにその点を押さえておき、沖繩では花、あるいは木、草木を生活の中でどのようにとらえていて、どうしてテダ(太陽)が花なのかという問題を考えたいと思います。

ウチナンチュの花のとらえ方や呼び方は、ヤマトンチュ、つまり本土の人とはかなり異なっております。沖繩の代表的

な花について、写真を参考にその意味や役割を紹介します。

まず沖繩で有名なハイビスカスです(巻頭写真3)。これは沖繩では「仏桑華」または「赤花」と呼ばれています。ハイビスカスはしばしば、沖繩を代表する鮮やかなイメージで扱われています。ハワイやマレーシアでは観光客の歓迎用として、耳飾りや髪飾り、レイに使われますので、このハイビスカスのいいイメージが、私たちヤマトンチュにあります。それでおそらく沖繩でも、歓迎の花だと解釈されるようになってきたでしょう。しかしもともと沖繩では、これは赤花と呼んで、供花、あるいは先祖を祀る花の使い方をしているんです。沖繩には、先祖を祀る大きな亀甲墓や、家墓、破風墓などの墓の種類があるんですが、その周辺の垣根でしばしばハイビスカスが見られます。片や歓迎の花、片や弔いの花。美しい情熱の花ですから、弔いよりも、歓迎に使うほうがいいようにも思います。

デイゴは沖繩の県花です。南国の五月の空に映えて美しい真つ赤な花ですね。デイゴ、ハイビスカス、ホウセンカなど、沖繩は赤い花が非常に象徴的です。ホウセンカは、先ほど曲を聞いていただいた「ていんさぐの花」です。歌詞に「親の教え、言う言葉は心に染みる」とあります。ていんさぐの花は爪を赤く染めるのに使われてきましたが、親の教えは心に染みるという教訓歌に喩えとして用いられているわけです。その他、ブーゲンベリア、トックリキワタ等も沖繩を代表する花ですが、みんな赤いです。しかし赤い花は、それこそ沖繩戦で流された血の象徴として、これを見て想い起こし、嫌

がる年配の方もいらつしやるんですね。

アダンやウージは沖縄を代表する景観を担っており、島唄に「ウージの森であなたと出会い、ウージの下で千代にさよなら」という歌詞があります。ウージの森でと言いますから、相当大きな大木の中で出会うような話かと思つたら、何とサトウキビのことなんですね。確かに沖縄の景観といえはサトウキビ、どこへ行つてもサトウキビです。白いススキのような花を咲かせます。だいたい高さが三メートルぐらゐ。だから、人が隠れるんでしょうね。それで「ウージの森で出会つて」となる。戦争中には飛行機の空爆をウージの森に隠れて逃げたということもありました。そこで、愛と死の歌が生まれたのです。

沖縄のサトウキビは、その歴史と密接に絡み合っています。一六〇九年に薩摩藩が奄美・琉球列島を支配したときに、サトウキビが導入されました。以後シュガー・アイランドとして、略取の対象となります。薩摩藩に略奪され、間接的に江戸幕府に組み込まれることになるわけです。

このように沖縄の花は日常生活にあつて、鑑賞するだけでなく、人の生き死にに関わる象徴としていろいろと語られています。

続いて、琉球王朝が一五世紀から一七世紀に編纂した韻文集「おもろさうし」の中によく出てくるクバ（ヒロウ）と、シークワーサー（ヒラミレモン）の話に移ります。クバは神から霊を宿す木として、いろいろな霊地、沖縄では御嶽ミヅノと呼ばれますが、そこに白い花を咲かせます。資料に示しました

ように「おもろさうし」の「白い風と蒲葵の花」は、聖地向かう船上での歌です。「さわやかな蒲風が吹いた。すると船に乗って、我が浦に浦白が吹く。船を漕ぐ櫂の手元にしぶきが上がる。まるで蒲葵の花のように黄金の色に輝いている」とあり、聖地とクバの木の聖なる関係を歌っています。その後、黄金の色に輝く象徴として、「あがるいのこばもり」という語がありますが、これは「東方のこばもり」、東方のクバの御嶽すなわち久高島の聖地を指しています。聖地に神の憑依するクバの花が咲くということです。

クバは聖なる木として「おもろさうし」によく出てきます。もちろん生活にも役立っていて、うちわに使つたり敷物に使つたり、かごにしたり、包み物にしたりして利用されます。

それともう一つ、ヒラミレモンです（巻頭写真4）。これは徳島名産のすだちと似ていて、今日では、健康食品として、ジュースが盛んに売られているようですが、沖縄では九年母・シークワーサーと言います。「おもろさうし」の「黄金木の下で」を見て頂くと「ごゑくあやみやに／こがねげはうへて／こがねげが下」とあります。黄金の木の下で神遊びするということです。そして次の歌も「大ぬしが御まへに／くねぶげは植へておちへ」という言葉があります。「黄金の木」、「くねぶ」はシークワーサーです。太陽の光を受けて黄金色に輝くシークワーサーは、太陽の霊力を受けたものとして非常に神聖な意味を持ち、「黄金（コガネ、クガニ、クネブ）」と呼ばれるのです。

太陽の霊を受ける花、木、実がそのまま霊場と関係して存

在する。その背景には太陽への信仰、さらには太陽の上がる、東方への信仰があります。沖縄では東のことを「あがり」と呼びますが、はるかかなたのあがり、はるか東方にある「ニライカナイ」（あらゆる富、豊穡、生命の根源があるとされる神の国）への憧れは沖縄の基本形とも言える信仰です。それで、沖縄の人は太陽への憧れをこめて「太陽が花」、「テダが花」と言い、太陽のことを「黄金花」と呼ぶわけですから。

プロの写真家が撮った太陽の写真（巻頭写真5）をお見せします。沖縄で「あけもどろの花」というのは太陽のことです。この写真も非常に荘厳な太陽です。沖縄ではまさに太陽が花でして、その花へのウチナンチュの信仰があり、それに「ニライカナイ」への憧れが強く結びついて、今日まで長い間受け継がれてきています。

こういった太陽信仰が、現代の沖縄の人たちにあるのかと言いますと、残念ながら、だんだん薄れているようです。昔は「クガニバナ」は太陽のことだったんですが、今はお金のことを指すんです。先ほど聞いていただいた夏川りみの『黄金の花』という歌にありました。黄金の花に魅せられて、本土に出稼ぎに行ったが、だまされて帰ってくるウチナンチュの人の悲哀を歌っています。いつの間にか純粋な人たちが汚れて帰ってくる。本当の花を咲かせてね、お金で心を捨てないで、お金はいつか散るんだ。本当の花を咲かせて欲しいという歌です。それは「テダが花」なんでしょうね。復帰後約三〇年間で、日本が七兆円も沖縄に投資して、あらゆるところで開発・公共事業をした結果、生活は本土並みになりました。

た。しかし、結局お金に魅せられた心はヤマト化してしまつて、本来の沖縄にあった、自然に同一化して生きていくという姿が、徐々になくなっている。聖地も随分と壊れてしまい、そこで継承される本来のお祭り事もなくなってきています。私はフィールドに三〇年ぐらい関わっていますが、最近寂しいかぎりです。私たちも、そうなったのは何故かを考えてみなければならぬと思っています。